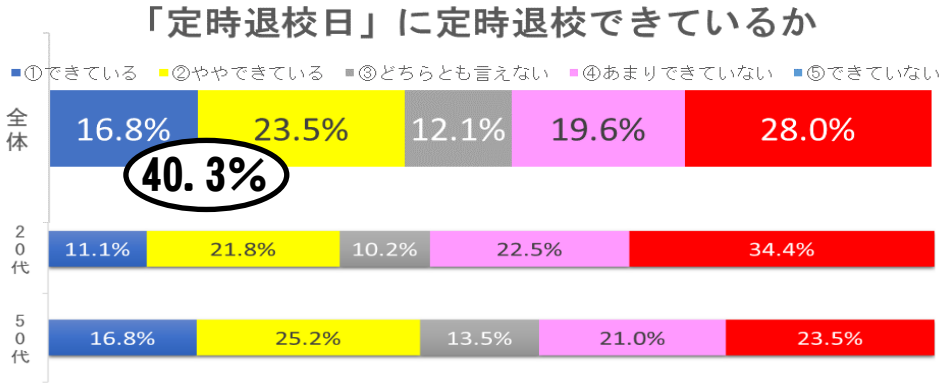
【分析４－１】教職員の意識（R6.10 実施　多忙化改善に関する意識調査より）

資料４

〇調査期間　　令和６年１０月２日（水）～１０月１８日（金）
〇調査対象　　県立学校・市町立学校に所属する教職員
〇回答数　　小学校２，５１７名、中学校１，２７５名、全日制高等学校６７７名、
定時制高等学校１０６名、特別支援学校２４４名　合計４，８１９名（回収率５９．３%）

①　学校ごとに設定している「定時退校日」に、教職員の４０．３%が定時退校できている。

「定時退校日」に定時退校できているか

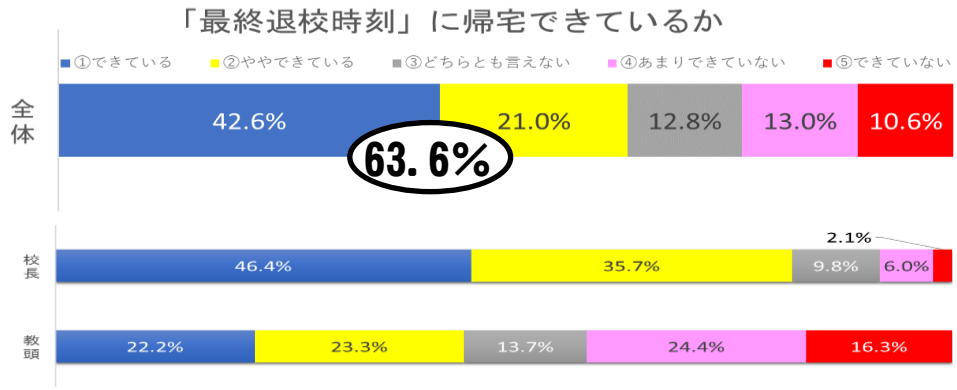


〇県内全ての学校で、学校ごとに月２回以上の「定時退校日」を設定している。教職経験年数や主任等の役の有無と相関していると考えられる。

・学校全体で会議や出張がない「ハッピーデー」が２学期から始まり、平日に定時退校できた。（20 代・小学校教諭）
・月に１回、短縮日課の日がある。その日の放課後は会議も入れないこととし、教材研究の日としたところ、全員が定時退校できた。（50 代・小学校教頭）

②　学校ごとの「最終退校時刻」に、教職員の６３．６%が帰宅できている。

「最終退校時刻」に帰宅できているか

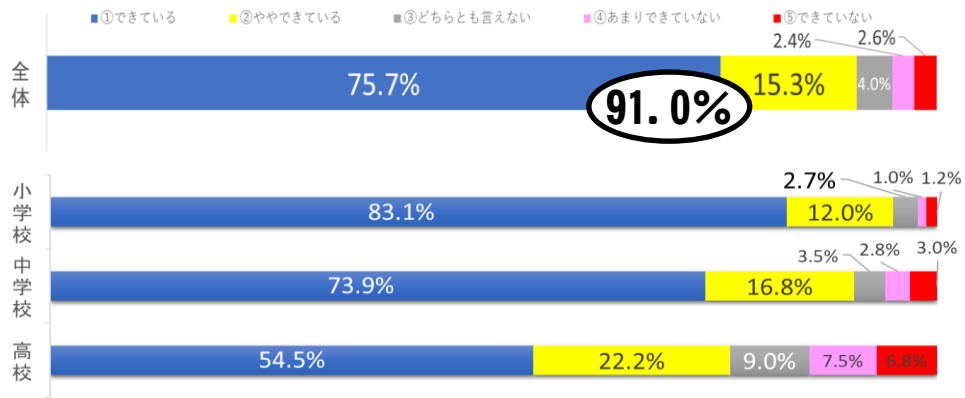


〇県内全ての学校で、学校ごとに「最終退校時刻」の目標を定めている。役職による差がみられた。

・15 時までに児童を下校させる曜日については，教職員の帰宅時刻も早いと感じる。（４０代・小学校主幹教諭）
・学校にもよるが、緊急の場合を除き、勤務時間を過ぎても会議が終わらず、それを仕方がないと受け入れる雰囲気は改善していかなければならないと感じる。
（６０代以上・小学校教諭）

③　夏季休業中の「学校閉庁日等」に、教職員の９１%が年休等を取得し、休むことができている。

リフレッシュウィーク・学校閉庁日に、休むことができているか

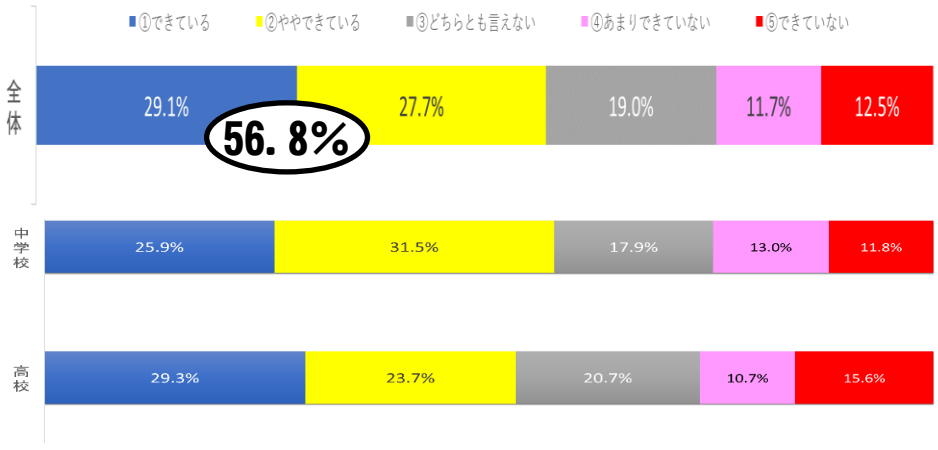


〇夏季休業中に連続する４日以上の「リフレッシュウィーク・学校閉庁日」を設定している。行事等と期間が重なる等の都合から、校種による差が生じていると考えられる。

・学校閉庁日は、生徒も登校が禁止されているので確実に休みがとれる。（３０代・高校教諭）
・閉庁期間中の教員でなくてもできる仕事（花の水やりやウサギの世話など）は地域ボランティアの方へお願いしたり校舎管理員へ割振ってもらったりしたことで休むことができた。
（４０代・小学校教諭）

④　部活動の「休養日や活動時間」の設定により、部活動顧問の５６．８%が時間外勤務時間を縮減できている。

部活動において、休養日や活動時間の設定により時間外勤務を縮減できているか



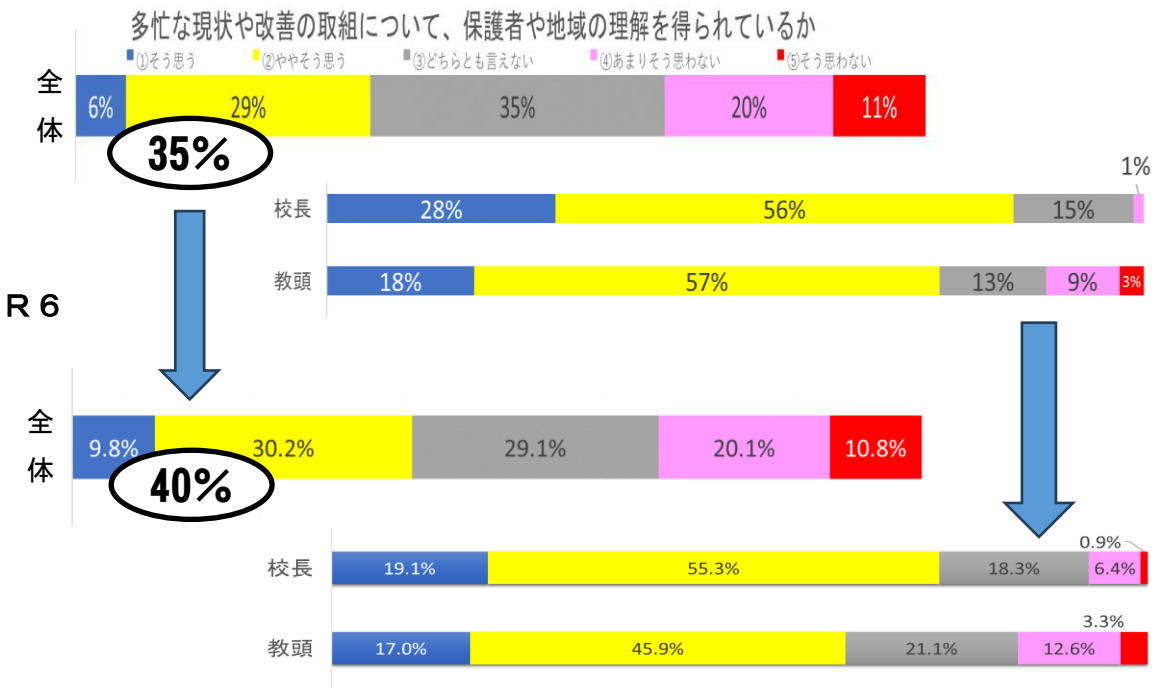
〇部活動休養日は原則として週２回以上、平日１日と土曜日または日曜日とし、１日の活動時間を平日は２時間程度、休日は３時間程度としている。指導体制を工夫したり活動時間にメリハリをつけたりすることで縮減が進んできていると考えられる。

・部活動の運営方針を策定し、生徒保護者に周知した上で、休日の部活動を一層縮小したことで、時間外勤務が月単位で縮小できた。（４０代・中学校教諭）
・放課後練習の監督を、顧問と副顧問の２人交代制で行うことで、時間外勤務を減らしている。（３０代・高校教諭）

【分析４－２】教職員の意識（R6.10 実施　多忙化改善に関する意識調査より）

資料４

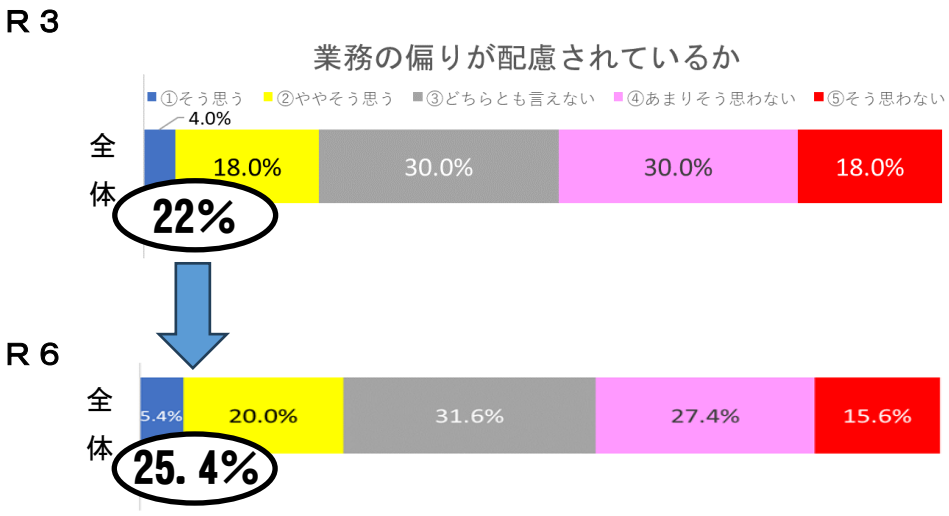
⑤　教職員の多忙化改善に向けた取組への「保護者・地域の理解」は、４０％の教職員が進んだと感じている。



○教職員の勤務時間の現状や多忙化改善に向けた取組について、保護者や地域の方々に理解と協力を求めている。引き続き、教職員の勤務時間の周知及び具体的な取組に対する理解と協力を求めていく必要があると考えられる。

- 保護者、地域の皆さんに教職員の勤務時間について、理解を得る必要がある。（５０代・小学校教頭）
- 保護者との行き違いを防ぐため、学校の電話で「通話を録音している」旨のメッセージを流す。（５０代・小学校養護教諭）
- 保護者と面談等を行う必要がある場合は、面談時間を決めた上で勤務時間内に行うということを周知し理解を求めるとよいと思う。（３０代・小学校教諭）

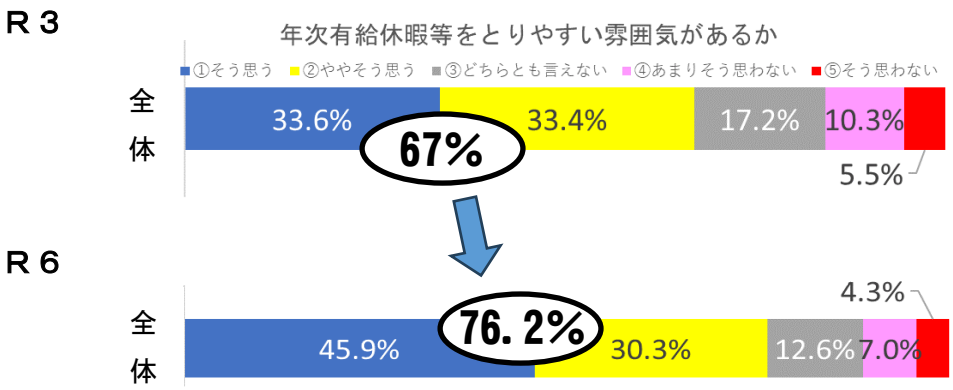
⑥　業務の偏りが配慮されていると感じている教職員は、全体の２５．４％にとどまっている。



○令和３年度調査時よりも、肯定的回答の割合が３．４％増加した。役職や役割によって業務量に偏りがあることが課題となっていると考えられる。

- 複数担任制にすることで担任業務の分担ができ、平準化できると思う。（３０代・中学校教諭）
- 業務の平準化といっても、年上の方へ仕事を頼みにくいし、若手がいても業務を教える時間すら惜しいくらい仕事に追われている。さまざまな取組例をもっと勉強して業務改善を図りたい。（３０代・中学校教諭）

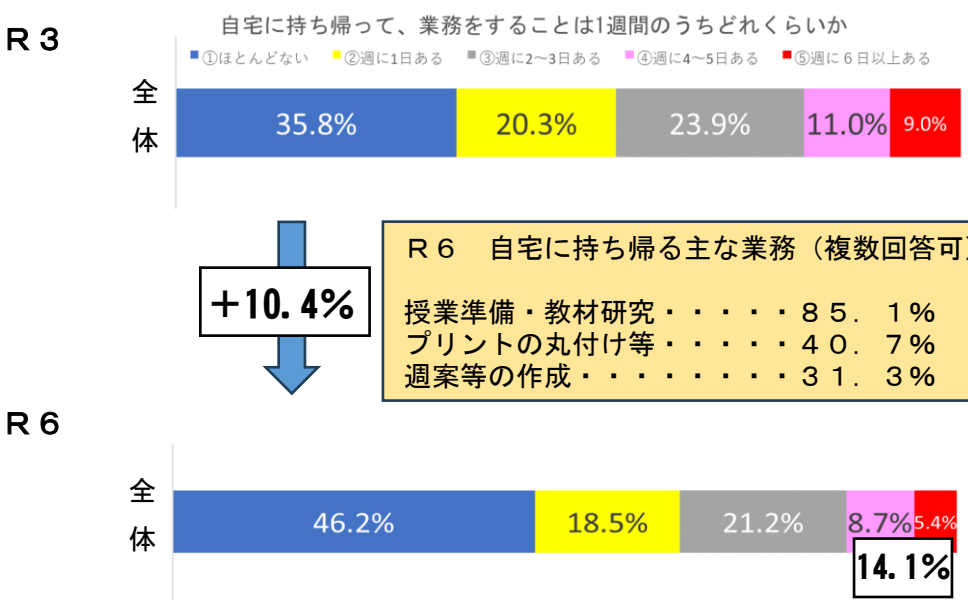
⑦　年次有給休暇等の取得について、教職員の７６．２％がとりやすいと感じている。



○令和３年度調査時よりも、肯定的回答の割合が９．２％増加した。取得に対する管理職からの言葉かけ等によって、年休等をとりやすい雰囲気が作られてきているといえる。

- 現任校は管理職が朝礼等で年休取得を事あるごとに推奨してくれる。その一言があるかないかで、学校の雰囲気が変わるように思う。（４０代・高校養護教諭）
- 他県採用の友人から授業のある日に計画的にみんなが、年休をとっていくという計画的年休消化について聞いた。夏休みでなくても、リフレッシュするための年休は必要であると思う。石川県でも実施して欲しい。（３０代・小学校教諭）

⑧　自宅に持ち帰って、業務をすることについて、教職員の４６．２％が「ほとんどない」と回答した。



Ｒ６　自宅に持ち帰る主な業務（複数回答可）

授業準備・教材研究・・・・・８５．１％
プリントの丸付け等・・・・・４０．７％
週案等の作成・・・・・・・・３１．３％

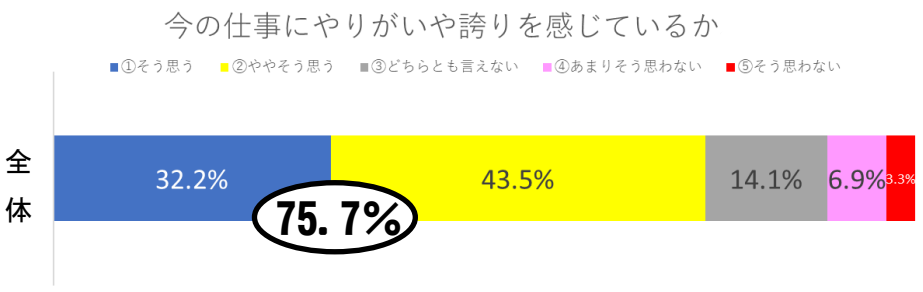
○令和３年度調査時よりも、持ち帰り業務が「ほとんどない」と回答した割合が１０．４％増加した。引き続き、授業準備や教材研究等の時間を確保するために具体的な取組が必要であると考えられる。

- 学校ですべき業務とそうではない業務のすみ分けをすることで、教材研究の時間を充分に取れるようになり持ち帰り仕事も減ると思う。（３０代・中学校教諭）
- 放課後にも会議等があり、授業準備や校務分掌は家での持ち帰りになる。まだ子供も小さいため夜の時間を使うことは難しく、朝早く起きて仕事をしている。（４０代・特別支援学校教諭）

【分析４－３】教職員の意識（R6.10 実施　多忙化改善に関する意識調査より）

資料４

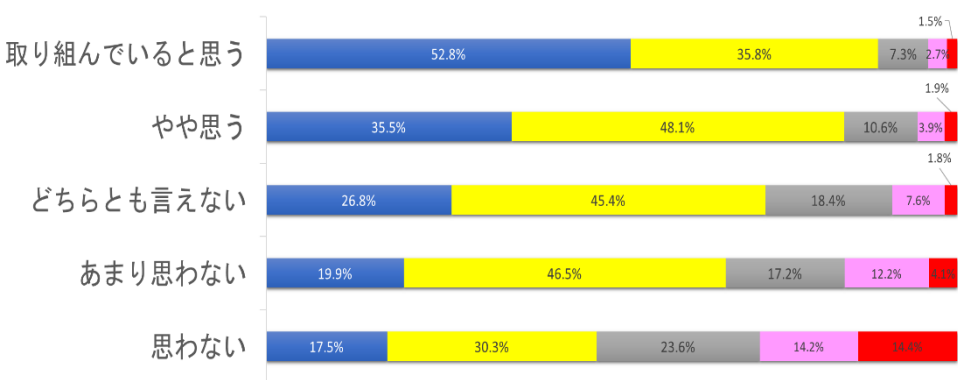
⑨　今の仕事について、教職員の７５．７%がやりがいや誇りを感じている。



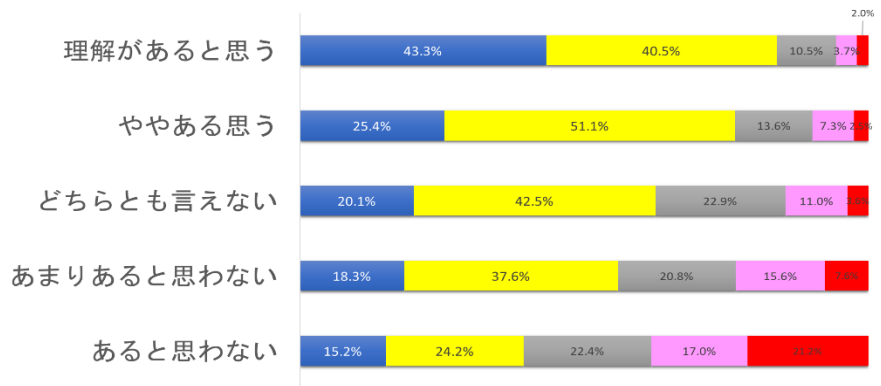
〇管理職のワークライフバランスへの理解と相関している。
勤務校の多忙化改善への取組と相関している。

・仕事にやりがいは感じるがそれ以上に仕事が多いと感じる。（３０代・小学校教諭）
・気持ちよく、元気にやりがいを持って働けるためには改善が必要不可欠だと思う。学校によって意識や実態に本当に差があると感じる。よいものを共有したり統一したりできるとよいと思う。（30 代・小学校教諭）

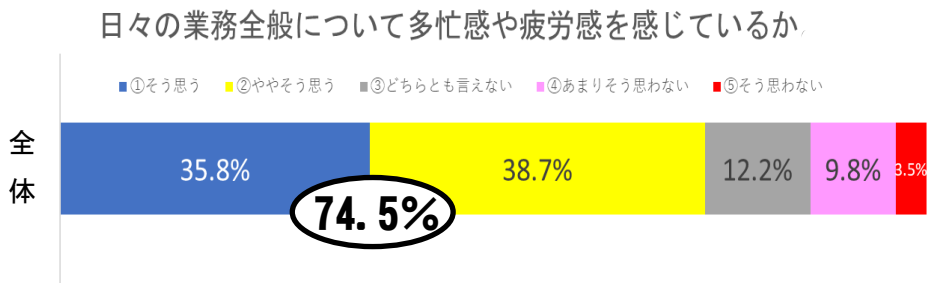
勤務校では多忙化改善に取り組んでいるか　×　やりがいや誇り



管理職のワークライフバランスへの理解　×　やりがいや誇り



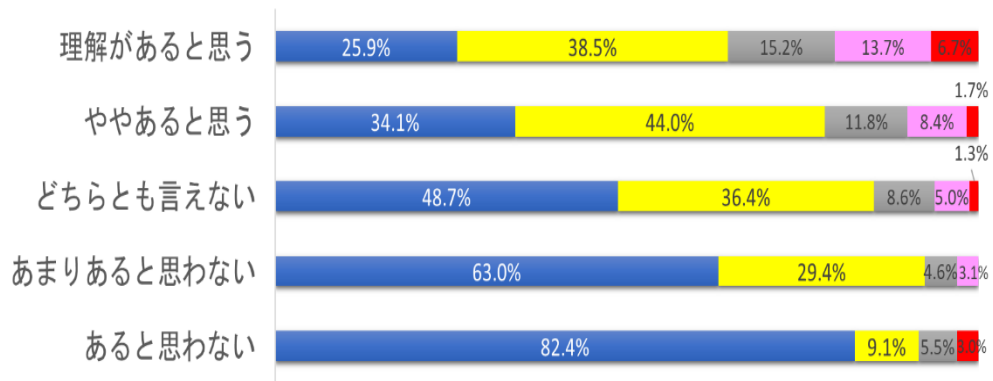
⑩　日々の業務全般について、教職員の７４．５%が多忙感や疲労感を感じている。



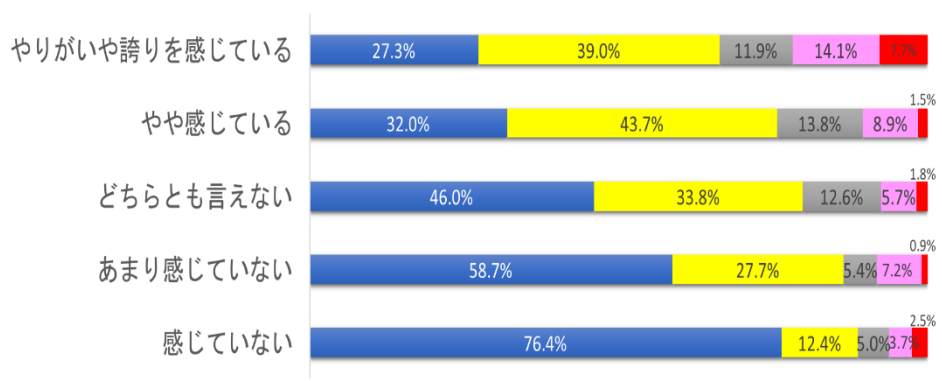
〇管理職のワークライフバランスへの理解と相関している。
仕事に対するやりがいや誇りと相関している。

・夏休み中の補習を減らしたことは、先生方の多忙感減少につながっていると感じる。（５０代・高校教諭）
・教育課程を見直し、思い切って授業をカットすることも大切だと感じる。その結果、教員も生徒も共に余裕をもって学校生活を送ることができると思う。（４０代・中学校主幹教諭）

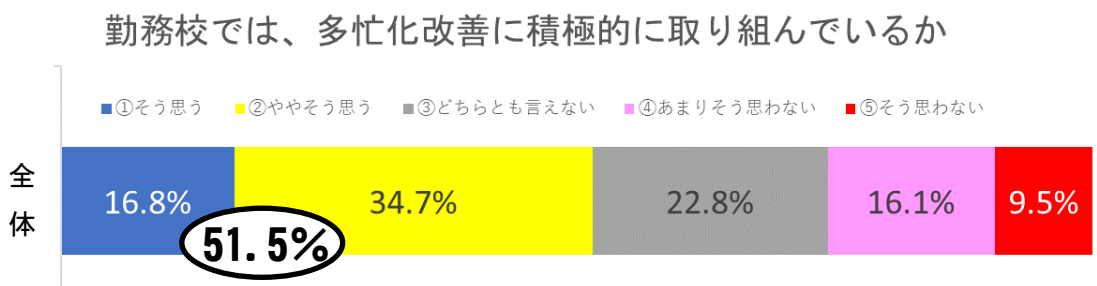
管理職がワークライフバランスに理解があるか　×　多忙感や疲労感

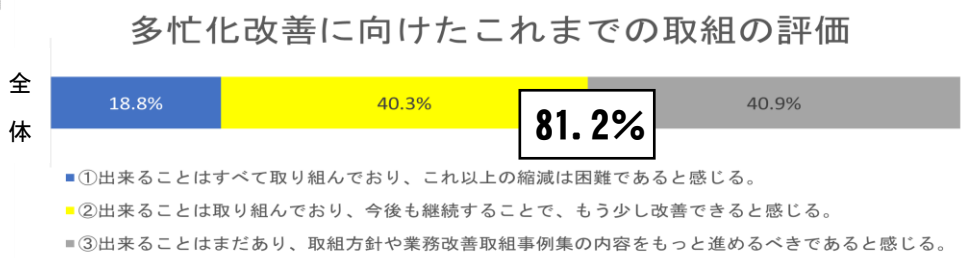


やりがいや誇り　×　多忙感や疲労感



⑪　勤務校について、教職員の５１．５%が積極的に多忙化改善に取り組んでいると回答した。





〇採点業務省力化ソフトの導入や日課の工夫等、好事例について横展開が進んできているが、今後も取組の深掘りを進めていく必要がある。

・ICT 支援員の配置は教職員の多忙化改善の効果を実感している。特に，不登校生徒に対する遠隔授業の導入などにより，ますますそのニーズが高まっている。更なる ICT 支援員の配置（隔日勤務から毎日勤務へ改善する等）をすべき。
（５０代・高校副校長･教頭）

【分析４－４】多忙化改善に関する意識調査　自由記述より一部抜粋

資料４

①【校務のＩＣＴ化について】

＜好事例と言える取組＞

・直接会場に行かなくても、オンラインで受講できる研修が増えたことで負担が減った。（２０代・小学校養護教諭）

・リアテンダント（採点業務省力化ソフト）を使った採点により負担が減った。（３０代・中学校教諭）

・授業の出欠管理を教務手帳ではなく iPad（Excel ファイル）で行うことで、集計が楽になった。（３０代・高校教諭）

・百問繚乱（採点業務省力化ソフト）を使った採点、印刷後製本もしてくれる複合機の導入、研修のオンライン化で負担が減った。（３０代・高校教諭）

＜その他＞

・高校への出願手続きを web でおこない調査書作成の負担を減らす。（２０代・中学校教諭）

・石川県全域で C4th（統合型校務支援システム）と教職員用タブレットの使い方を統一する。（３０代・小学校教諭）

・起案や年休取得等、紙の内部書類は全て ICT 化できたらよい。（４０代・高校養護教諭）

・対面・電話文化（同期コミュニケーション）からチャット文化（非同期コミュニケーション）へシフトする。（５０代・高校副校長･教頭）

・各種団体のお知らせの配布を tetoru（双方向型連絡専用スマートフォンアプリ）の登録者に学校以外から発信する。市内の各学校の業務が１つで終わる。（５０代・小学校教頭）

②【コロナ禍での対応を活かすことについて】

＜好事例と言える取組＞

・短縮日課を設定していると、放課後仕事に取り組める時間が増えた。（２０代・中学校教諭）

・体育祭当日のグラウンドのライン引きを PTA にお願いしたこと。（３０代・中学校教諭）

・地域の見守りや行事のお手伝いなどを省いていただいた。（３０代・小学校教諭）

＜その他＞

・教員の勤務時間は８：１０～であるが、生徒の登校可能時間が今は７：４０～になっている。生徒の登校可能時間が勤務時間以降となるよう、全体の時間を遅らせる。（２０代・中学校教諭）

・保護者の方への対応に放課後の時間がとても多く使われているので、時間を決めて、緊急性のあることを除き、時間外の対応は行わない。（３０代・小学校教諭）

・午後授業のない日を設けて教材研究を行うまとまった時間を確保する。（５０代・小学校教諭）

③【若手教員早期育成について】

＜好事例と言える取組＞

・管理職の方の退勤が比較的早く、早く帰るよう声かけにまわってくれたり取り組んでいる業務についてアドバイスをくれたりすることで、改善することができた。（２０代・小学校講師）

・同学年での教科担任制の導入により、教材研究の時間を削減できるように思う。掃除なしの日課は、児童下校後に教材研究やほかの作業ができるので良い。（３０代・小学校教諭）

＜その他＞

・複数担任制にすることで仕事が偏ることなく早く帰宅できると思う。学習指導以外にも不登校対応、保護者対応、福祉的要素の強い仕事など負担が多い。（２０代・中学校教諭）

・「多忙感」が多くあるように感じる。持ち帰り仕事や土日にこっそり出勤している職員もいる。時間外記録の入力等、数値だけでは測れない現状がまだまだ現場にはあり、若い人たちへの「多忙感」が減るように努めている。（５０代・小学校教諭）

④【部活動地域移行について】

＜好事例と言える取組＞

・本校ではないが、スポーツ庁の委託を受けた部活動地域移行モデル事業は、部活動顧問の先生方には非常に好評であった。（４０代・中学校教頭）

・テスト前一週間を部活動停止に合わせ日課を変更していることで、余裕を持って放課後の時間が取れており良いと感じている。（３０代・中学校養護教諭）

＜その他＞

・残業時間の大半が部活動であり、大会の申し込みや運営、選手登録など、表にはあまりでない業務が非常に多い。（３０代・中学校教諭）

⑤【教育委員会の取組について】

＜好事例と言える取組＞

・教頭マネジメント支援員が配置された。この取組は教頭だけでなく、私たちの多忙化改善にもつながると思う。（４０代・小学校教諭）

＜その他＞

・定時または月２０時間の残業で帰ることができる働き方のモデルを示してほしい。（３０代・小学校教諭）

・いじめアンケートをフォームによる回答にしてほしい。（５０代・小学校教諭）

・プールの管理や就学時健診の委託をお願いしたい。（２０代・小学校教諭）

・週案作成に多大な時間をかけている印象を受ける。週案に記載する内容を軽減して頂くことで多忙化改善に繋がると思う。（３０代・小学校教諭）

・免許外教科の教材研究が大変であるため、専科の先生の授業をオンラインで行うなどの取組があるとよい。（４０代・中学校教諭）

・前職の経験から、フレキシブルタイム、コアタイムを導入することで、働き方が変わる。（５０代・高校校長）